

「早すぎた9か月」

昨年の8月から埼玉県親善大使として始まった私の留学生活にも、ついに終わりが来ました。留学生活の最終月となった4月に起こった面白いこと・興味深いこと・記憶に深く刻まれたことなどを書いていきたいと思います。

地質学との戦い

1月の報告書でも触れましたが、私は、午前中にフィンドレー大学の学部の授業を4つほど受講しています。その中で最も私を苦しめたのが、Geology（地質学）でした。実は、地質学には、高校生のときから若干興味があり、大学でも専攻として勉強しようと考えたことのある分野です。そのため、今回、フィンドレー大学で地質学の勉強をすることができて本当に開始当初は幸せでした。

地質学の授業は、週に2回75分間実施されており、授業が行われた教室は、周囲の壁に様々な種類の石が展示されており、まるで、地質学による地質学のための教室と呼んでも過言ではないほどでした。授業のスタイルは、2種類存在しています。一つは、地質学専門の教授（ケープ教授）がホワイトボードへの早すぎる板書や、プロジェクター・パワーポイントによる写真などの図を用いて、地質学の基礎的な知識を学生に伝えるという、いわば、受動的な授業であるLectureクラス。もう一方は、実際に1メートル四方は少なくともある巨大な地図や、岩を分類するための道具（やすり・ルーペ・分類チャートなど）を駆使して、実践的な知識・技術を身に着ける能動的なExerciseクラスでした。主にこの二種類の授業が織り交ざって、地質学の授業が進行していきました。

英語の理解力が周囲のアメリカ人の学生に比べて、数億分の一である日本人の私は、どうにか努力して彼らに食らいついていかなければなりませんでしたが、しかし、教授の迅速な板書や、針を通す隙間さえ与えない淀みのない説明に、私は呆然とするか、狼狽するかのどちらかでした。ただ、日本の大学と同じような受動的な授業だけでしたら、このような理解力の遅さというのは顕著に現れること

はありません。なぜなら、理解せずに板書を写し、教授の発言にただ黙って首を縦に振り、テスト前に勉強するだけでいいからです。



苦しかった授業の様子

しかし、フィンドレー大学の授業ではそれが許されませんでした。その機能を果たしていたのは、能動的な授業の Exercise のクラスでした。たとえば、オハイオ州近辺の土壌の成分や、海拔の高低差、また、井戸の位置とその湧き水が噴出する深さ、などの情報を数枚の巨大な地図から読み取り、それをワークシートに記入して提出しなければいけません。また、ときには、一見、素人目には、どれも同じにしか見えない岩をどうにか分類せねばなりませんでした。

ちなみに、すべてのワークシートの項目の記入が終了しないと、用を足す以外に教室外へ出ることは禁止されています。そのため、周囲のアメリカ人の学生は、理解度の速いアメリカ人の学生同士で結託し、この実践的な課題に取り組み始めます。一方、教室に取り残された英語の理解力に欠けた留学生である日本人の私は、一人でこの課題に取り組み始めなければなりませんでした。周囲のアメリカ人の学生は、基本的に外国から来ているアジア系の男子留学生には興味を示さず、坦々と自らの作業を進めていきます。

さすがに私も危機感を感じ、隣に着席していたアメリカ人の男子学生にわからない部位の質問を試みました。しかし、彼は、私に嫌な顔一つせず教えてくれるのですが、ろくに予習もしていなかった私は、ほぼすべての質問の意味がわかりませんでした。そのため、課題を終了させるには、すべて質問しなければならないという非常に苦しい状況に陥っていました。また、彼の進行速度をいちいち遅らせている自分の無能さにも段々と嫌気がさしてきました。そこで、私が採用した妥協案は、予習をできる限りして、時々通り過ぎる教授に手を挙げて質問を重ねる、というものです。ただ、この妥協案は残念ながら、完璧と言えず、苦勞をかける対象が学生から教授に単にシフトしただけでした。また、約30人の生徒を抱える教授に質問が許されるのは、ほんの一握りの時間だけだったので、結果的に授業後に一人居残りをすることが度々ありました。ただ一人、広い教室で凡庸な石の分類を黙々としているときは、本当に辛いとしかいいようがありませんでした。



始終お世話になりすぎたケーブ教授

唯一、この授業で楽しかった思い出は、地質学的アメリカンジョークと遭遇できたことです。それは、変成岩 (Metamorphic Rock) の分類に没頭している最中でした。度重なる観察と試行錯誤の結果、下の写真の岩が Gneiss (片麻岩) と

いう種類に分類されると、私の頭の中で結論が出ていました。しかし、あまり自信がなかった私は、ケーブ教授に、

「この岩は“グネイス”でよろしいでしょうか」

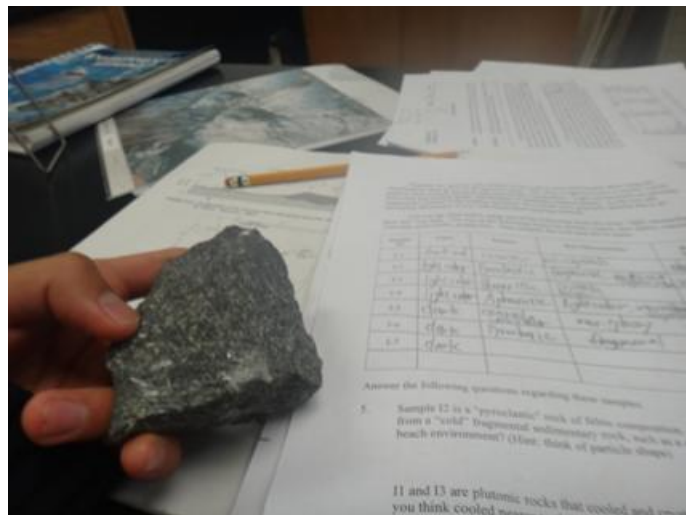
と恐る恐る尋ねてみました。すると、彼女はニンマリした様子で、

「その通りです！でもその岩の名は“ナイス”と読みますよ」

と回答してくださいました。まさかの Gneiss の G を発音せずに通り過ぎるという例外的な読み方に、私は暫しの間、啞然としていました。そんな私に、ケーブ教授は、

「What a nice gneiss!!（なんて素敵な片麻岩なんでしょう！）」

という新しいアメリカンジョークを伝授してくださいました。私は、そこらの河原に落ちてそうなナイスを握りしめ、頭の想像の世界でこの岩を川へ投げ捨てました。



これが噂の Gneiss（ナイス）

ただ、一つだけ、この授業で自分の存在価値が光った瞬間がありました。それは、地震に関する講義を行ったときです。フィンドレー大学が位置するオハイオ

州では、火山活動がなく、さらにプレートの境目などの地震の要因となるものはありません。そのため、約 30 人の学生の中に本物の地震を経験したことがあるアメリカの学生は一人もいませんでした。ある、クリーブランド（オハイオ州の北東部の都市）の出身の学生は、消防署の地震体験機で仮想的な地震の揺れを体験したことがある、と高らかに公言していました。

日本では、地震の体験というのは、万人にとって日常茶飯事であるため、光り輝く経験ではないですが、ここアメリカのフィンドレーでは、地震の体験というものが貴重になりえるのでした。僕は、この体験に自らの価値を見出していました。

そこで、ケープ教授が私に、地震に関する話題をさりげなく振ってきました。しかし、英語力に乏しい私は、片言の英語で、2011 年 3 月 11 日に起こった東日本大震災により、津波が発生し、福島原子力発電所が爆発した、という主旨の話を必死に他の学生に向けて熱弁してみました。しかしながら、私の英語力に辟易したのか、単に己が経験したことのない自然現象に興味があったくわからないのか、周囲の学生はまるで興味を示すことはありませんでした。その周囲の無関心を看取って、ケープ教授も次の話題へと移行して行きました。私は、自分の伝達能力のなさに落胆すると同時に、より多くの情報を英語で伝え続ける勇気がなかった自分に失望しました。英語で伝えなければいけない情報は事前に準備しておくべきだと数か月前に悟ったにも関わらず、怠っていた自分に段々と嫌気がさしてきました。

大学の授業に対する考察

長々とどうしてもよいことを書いてきましたが、この学期で受講した 4 つのクラスで感じたアメリカの大学の特徴とそれらに対する考察を、まとめとして書きたいと思います。

まず一つ目は、その能動性に富んだ授業です。地質学もしかりですが、ほかの授業でも、必然的に学生がその科目の学習に時間を割かなければならないシステムが綿密に構築されています。たとえば、天文学の授業では、それが徹底してい

ました。この授業では、レクチャーノートと呼ばれる問題集を、各授業で教授が講義をし終わった残りの5分から10分で学生たちに解かせ、その解答が終了した学生から順に教室を出させる、という仕組みを採用していました。そのため、教授が講義している間に仮眠をとってしまったら、一貫の終わりです。また、授業後に学生に復習をさせる体制も同様に整っていました。天文学では、オンライン上で、50以上にも及ぶ選択問題を定期的に解かなければならず、テスト前だけに勉強するという付け焼刃勉強法では、よい成績が取れないようになっていきます。

二つ目は、留学生に対する無関心です。これは、一学期目に取得した英語集中クラス IELP では感じる事がなかった点です。各国からの留学生が集まる英語クラスでは、学生同士は、アメリカに勉強をしにきている“同志”という位置づけでした。そのため、互いのことに関心があり、課題を進める際にも、互いに協力する姿勢を積極的に見せていました。しかし、学部の授業では、その状態が一変しました。アメリカ人の学生は、片言の英語を喋るアジア系の男子には、まったく興味がなく、私自身もどうやって彼らと仲良くやっていけばいいのか、まったくわかりませんでした。また、留学生と話し慣れていない彼らは、容赦ないスピードや語彙の選択をしました。そのため、英語能力が欠如していた私は、ネイティブの学生と話すことが分からず、苦笑いするのが怖いという逃げ腰にいつの間にかなっていました。ただ、私が日本でアメリカの学生と同様のことを留学生に対してしていたことにより気づきました。私は、日本に来ている留学生に対してあまりにも無関心でした。同じ研究室で勉強していたマレーシアの学生に積極的に話しかけたり、学外に遊びに連れていったりすることを全く怠っていました。日本に帰国したら、大学の留学生に対しての態度を改めなければいけないと痛感しました。

三つ目は、横のつながりのなさです。日本の大学では、同学年のつながりを重視します。入学から卒業まで関わる人はほぼ同一です。日本では、同学年のつながりを強化しておくこと、過去の優秀なレポートや、優良な情報を豊富に含んだ過去の試験問題が流れてくることがあります。そのため、横のつながりを強化することがよい成績をとることに繋がるとも言うことができます。

一方、アメリカの大学は、このような同学年の学生同士の馴れ合いというものがあるではありません。フィンドレー大学が若干、リベラルアーツの大学寄りだということもありますが、学生一人一人が独立しており、ほとんど皆、己の力だけでよい成績を取ろうとします。その証拠かわかりませんが、大学にコピー機は、図書館に一台だけしかあらず（私の大学には数えきれぬほど存在していた）、コピー機の前に列を認めたことは一度もありませんでした（私の大学ではテスト前には行列ができていた）。

また、同じ授業を受講している学生の層もバラエティに富んでおり、一年生から四年生までが混在していました。これも大きな違いです。ただ、敬語・謙譲語が存在しない英語で学生がやり取りしているので、とても違和感がなく、学生間の関係がとてもフラットであると感じました。日本の大学で同じ環境があったとしたら、教室で話される言葉の大半は尊敬語・謙譲語となり、教室の空気は同学年の学生のみで構成される場合とでは、一変するでしょう。

Tough Mudder OHIO 2013

2013年4月下旬、オハイオ州のMansfieldという都市で、「Tough Mudder OHIO 2013」というイベントに参加してまいりました。このイベントは、10マイル（16km）をチーム単位で走り切る、というイベントで、その道中は文字通り（mud = 泥）泥の道で、さらに、タフでないと通過できないような障害物が22か所にちりばめられているイベントです。

なぜ、このイベントに参加したのか、というと近所に住む台湾人の友人が、

「自分のタフネスを試したい」

というので、彼と一緒に私も軽い気持ちで新しいことにチャレンジしてみることにしました。このイベント情報をさっそく、自宅へ戻り、インターネットを利用して調べてみると、早くも自分の過ちに気づいていました。なぜなら、私よりも一回りも二回りも大きく、そして強そうな男性たちが、自分の二倍強の壁を憤怒の形相で上っていたり、氷で埋め尽くされた冷水に潜り、障害物を突破したりしており、正直、私がこれまで一人で黙々と励んできたマラソンのトレーニングでは、どうにもこうにも太刀打ちできそうにないことが、誰の目からも明らかでした。そのため、男に二言はない、という言葉に胸に、総合的に強い男になる決心をしました。

まず、私が今まで苦手としていたトレーニングジムに通いだしました。先ほどの台湾人の友人に教えを乞い、適切な負荷のかけ方、並びに、リフトを持ち上げる際の肘を曲げる限界角度などの詳細についても学びました。それからといもの、週に2~3回の頻度でせっせとジムに通い、トレーニングを積んでいきました。はじめは、自分の非力さに嫌気がさすほどですが、徐々に、己がかつて耐えられなかった負荷に順応し始めました。恥ずかしながら、無酸素運動の楽しさを人生で初めて見出すことができました。

また、このイベントレースは、チーム単位による参加がふつうだったので、あまりイベントについて知らない日本人の男子学生（秋山くん）を言葉巧みに勧誘し、私たちのチームは合計3人のメンバーにまで膨れ上がりました。

チーム合同練習を一度も実施しないまま、あっという間にレース本番を迎えました。私は、度重なるトレーニングにも関わらず、まだ、か細い上腕筋を視界に入れるやいなや、早くも私の脳内は不安という言葉で埋め尽くされていきました。レース会場に到着してみると、そこには、このイベントのウェブサイトで確認した強そうな男たちがそのまま現実世界に宿っていました。私は、インターネット情報の信憑性に舌を巻きつつ、己がこの数か月、仕込んできた鍛錬に目を向け、自尊心を高めようとしていました。ただ、予想外に女性の方が多く参加していることに、驚きを隠せませんでした。本当にアメリカの女性の方は、タフな方が多いと実感した瞬間でした。

ウォーミングアップしながら、顔に気合いのペイントを施し、いざ、宇宙で3本の指に入るタフなレース（大会本部によると）をスタートしました。私としては、泥にまみれ、救急車の通り過ぎることで生じる高音を耳にしながら、足掻き苦しんだレースのすべてを実況したいのですが、ここでは残念ですが省略して、最後の砦であった「Everest（エベレスト）」という障害での出来事について触れたいと思います。



これが噂のエベレスト

この世界最高峰の山の名がつけられた最後の障害に、なんとか辿り着いたのですが、私の右足はすでに諤々と痙攣しており、目の前にそびえたつ人工的な障害物を越えられる自分をどうしても想像することができませんでした。そのため、目の前で無残にも失敗していくチャレンジャーを横目に、私の小さな心臓は今にも張り裂けそうでした。ただ、この障害を一人の力で乗り越えるのは、よほどの猛者でなければ不可能なので、頂上で人を手助けしている他の参加者の方の手に縋りつくより他はありませんでした。私は、頂上で救いの手を差し伸べている参加者の方と、目を合わせ、目の前の最後の障害物に向けて闇雲に走り出しました。

なんとか、彼のたくましい腕をつかみ取った私は、「OK, good job!」と頭上から、今にも気を失いそうな私を鼓舞している声を聞き取りました。そして、今までのジム通いの鍛錬を思い返し、必死に天へ昇ろうとしました。彼の助けもあって、なんとか頂上の取っ手をつかむことに成功したのですが、この取っ手の奥行きが予想外に深く、手を滑らせそうになりました。しかし、そんなハプニングにも私の命の恩人は動ぜず、私を引き上げ、取っ手をつかませてくださいました。彼の助けもあって、なんとか峰のてっぺんにたどり着くことができました。私は、彼に対して頭を下げ、何度もお礼の言葉を述べたことを記憶しております。

この出来事で、アメリカ人の方のボランティア精神の高さに感銘を受けました。彼らは、このエベレストを登り切ったら、あとはゴールテープを切るだけであるにも関わらず、実に多くの方が頂上に居残り、他の参加者を助けていました。その彼らの影響を受け、私も人を助ける決心をし、頂上に居残りしました。しかし、私のか細い手では重量感のある彼らを一人で引き上げることはできず、他人を助けるために他人の力を借りる、という情けない状況に陥りました。しかしこの経験から、利益を顧みず他人を助けるというアメリカに根付いたボランティア精神を胸にこれからも生きていきたいと願ってもやみませんでした。

どうにか、私たち3人のチームは、無事に3人そろってゴールすることができました。スタート前には純白だった私のTシャツも、ゴール後には、きれいな茶色に変色していました。ただ、10月に走ったコロンバスマラソンでは一人でしたが、今回の4月のタフマダーでは、三人でゴール後の喜びを味わうことができ、達成感にあふれていました。一緒に走ってくれる仲間が0人から2人変わったという小さな進歩ですが、私の中では、この一歩は、大きな初めの一歩だと思っています。自分の趣味を自分の中で閉じるのではなくて、まったく関係のない他人にも影響を及ぼしていける人になりたいと願うようになりました。



泥を許せた瞬間（エイドリアン、私、秋山くん）

雑記

NB0 から機械工学系の奨学生 2 人に乗用車が 1 台貸与されていました。私は、8 月の中旬、初めてこのシビックに乗車したときに、まず、ウィンカーとワイパーを間違えて作動させ、さらに、道路の傍らの縁石に激突しそうになっていたことを今となっては、微笑ましく回想することができます。

この自動車で、同奨学生である相方の荒瀬君と一緒に、ニューヨーク、トロント、シカゴ、ケンタッキー、など様々なところに足を運びました。そのため、彼が好む曲の大半が私の好む、もしくは、聞き慣れた曲と化していました。また、時には、近所の貯水池に心を鎮めるため、一人で出向いたときもありました。

このように、アメリカで車の運転の経験を嫌というほど積んだはずですが、私の運転能力は全く向上せず、危険なドライバーとして周囲から認識されていました。ただ、無事故でこの留学生活を終えることができたのは、とても幸運というか、喜ばしいことです。人には向き不向きがあることを痛感しつつも、この 9 月

初旬に撮影した8月レポートの写真と同じポーズをとっている自分が、少しでも進歩したということをお願いしています。

今まで、一緒に辛抱強く生活してくれ、ものすごくお世話になった荒瀬君、また、不平ひとつ言わず軍資金の仕送りをしてくださった両親、いつも適切なアドバイスと笑顔をくださった川村先生、レポートの提出を辛抱強く待ってくださった田村様、行きつけの中国料理屋 QQ のワンタンスープ、そして、この短い留学生活で私と言葉を交わしたすべての方々、

どうも、ありがとうございました。



車とドライバーとアパートと iPad